

共に考える 住宅デザイン

甲斐 徹郎

○370

環境共生

私は東京・世田谷で「環境共生」という考え方をベースに、住まいや街づくりのコンサルティングを行っている。「環境共生」とは、周辺の環境の持つ力を生かして、省エネで心地いい街と住まいをつくり出す方法である。

こうした住まいづくりを追求する上で、大変役に立つことがある。それは、集落を歩くことである。先人たちが長い年月をかけて築き上げてきた集落のカタチには、その地域の気候風土を生かして、いかに心地いい住まいをつくり出すかという知恵にあふれている。

昨年、沖縄と宮古島の集落を見て回る機会に恵まれた。そこで発見した工夫は、私が実際に進めているプロジェクトにも大いに役立っている。今回から参加させていただくこの連載コラムでは、私が沖縄の集落や街を歩きながら気がついた考えをもとに、世田谷での実践も踏まえて、環境共生を追求した心地いい住

古い集落に見る知恵



石垣で生活豊かに

まいづくりの極意を皆さんにお伝えしたいと思う。まず最初に紹介したいのが、宮古島に保存されている六百年前の住宅である。葺き屋根で、家の中には、土の床に火を焚く場所があるだけの大変粗末な住宅である。昔の人は土間の上にもしろを一枚敷いて、火を囲んだのではないかと彼女は生活していた。島民が推論する。

この石垣への発展は、大変貧しかった時代のこんな粗末な住宅でも、その壁だけは立派な石積みでできていた。それは、台風から家族の生命を守るための精いっぱい備えであり、宮古島における住宅の原型と言ってもいいだろう。

宮古島の建築家・伊志嶺敏子さんから話を伺った。彼女の独創的な考えは、大変面白かった。時代とともに、豊かさを手に入れることで確立されてきたことがわかる。こうした流れに反して、エアコンを稼働させ、コンクリートの箱の中に閉じこもる生活が主流となった現代の住まい

の中で、われわれは本当に「心地いい生活」を実現できたのだろうか。実は、姿形は違っても、六百年前のレベルに退化してしまっていないだろうか。

次回から、人工的な技術だけではつくり出すことのできない、はるかに質の高い心地よさを実現させるための住まいづくりの極意を書かせていただく。(マーケティングコンサルタント)



竹富島の集落と家を囲むように建てられた石垣

